

日本語を学ぶ青春

お母さんの結婚を機に、中国から紫波町へやってきた布谷振(ぬのや しん)さん。お母さん同士が知り合いという縁で、その後、県外から紫波町にやってきた北條朝洋(ほうじょう ともひろ)さん。2007年度、2人は紫波町立紫波第二中学校へ入学しました。2人はどのように日本語を学び、学校生活になじんだのでしょうか。

個性の際立つ2人

ほがらかで冗談好きの布谷さんと真面目で慎重な北條さんが、日本に来てはじめて覚えた日本語は、布谷さんは「何これ?」、北條さんは「日本語分からない」でした。

2人とも日本語の授業を非常に意欲的な姿勢で受けています。布谷さんは間違っても自分から何でも話すのに対して、北條さんは文法を分析し、よく考えてから話します。

布谷さんは積極的に自分から友達をつくり、話し方に間違いがあつたときは彼らに正しい日本語を教えるてもらいます。北條さんは、自分から話すことは多くありませんが、好きなアニメやテレビのニュース、新聞からひろ



(左)布谷振さん、(右)北條朝洋さん。

った単語を辞書で調べ、授業でもその言葉について尋ねます。

「2人に友人ができたとき、学校になじんだなと感じました」。岩泉康喜校長をはじめ、教諭たちも温かく見守ります。

学校生活にて

2人ともはじめは陸上部に入りませんが、その後、同学年が1人しかいなかったバスケットボール部に入部しました。布谷さんは部をリードし、北條さんもバスケットボールに励むようになり、力強い存在となりました。

布谷さんは部活顧問の先生のものまねをして周りをなごませ、北條さんはシュートなどのやり方を部員に聞きながら練習しました。たどたどしい日本語の会話でも、2人とも友達をつくりたい、バスケットが上手く

なりたいたいという気持ちを強く持ち励みました。その努力が実り、「走って」「ボールを回して」と、指示を出して周りをリードし、頼もしい面が見られるようになりました。そのほか、ラグビーの試合にも参加し、積極的に友人らと作戦について話し合いもしました。

2人は知っている日本語を言いながら、細かいことを伝える表現には、まだ苦労しています。一時はコミュニケーションに悩んだこともありましたが、自分自身を変えようと持ち前の明るさと努力で乗り越えたこともあります。日本語の授業を受け、頭を悩ませながら、気持ちの表し方も一生懸命に学んでいます。そこから得た日本語の成果を発揮するため、布谷さんは担任の薦めで「私の主張」という弁論大会に出場したこともありました。

今後の夢

高校受験を控えている2人。布谷さんは「ホッケーなどバスケットボール以外のスポーツにも挑戦したい、そして将来は、通訳など日本と中国をつなぐ懸け橋になりたい」、北條さんは「真面目に勉強したい、そしてゲームソフトのプログラマーになりたい」とそれぞれ夢を語ります。

多感な時期に多くの事に直面し、母国語が違うことで苦労があっても、



日本語の授業風景。

2人はどんどん日本語を学び、自分の道を考えています。

紫波町立紫波第二中学校 (生徒177人、岩泉康喜校長)

2008年、学区内に転入した中国出身生徒が編入学し、中国で日本語指導の経験を持つ国語科教員を中心に対応。町教育委員会は、町内在住中国人女性を、生徒の学習や学校生活の支援のためにスクールヘルパーとして2009年度まで配置。現在は中国出身生徒3人が在学中。3年生2人は、今春高校進学を目指し入試を受ける。他県には、日本語を母語としない外国人生徒のための特別な入試制度を設けているところもあるが、県内公立・私立高校ではなく、個別に対応しているのが現状。

〒028-3312 紫波郡紫波町犬吠森字間木沢70
TEL:019-672-3480 FAX:019-672-3383

兄川に寄り添い育む「暮らし」

八幡平市兄川地区。タイ出身の関チエ(ツァーイ)さんとご主人、長男の3人家族が県外からご主人の出身地へ移り住んだのは、長男が小学校へ入るころ。「みんな優しい。だから暮らせる」。チエさんの生活は、伝統芸能のある地域の人々とのコミュニケーションがいっぱいあります。

地域に「生きる」

「何も生活に不自由したことはないよ。みんな、わたしを助けてくれてます。ありがたいです」。チエさんの言葉から、感謝の気持ちが強く伝わってきます。

県外から移り住んだころ、なじんでいけるのか、うまくやっていけるのか、不安や戸惑いの気持ちがありました。しかし、その気持ちはすぐになくなりまし。その地域に住む人が、言葉や方言、文化や慣習の違いなどを、何かあるごとに丁寧に教えてくれました。道を歩いていると優しく声をかけてくれ、また、家まで車で送ってくれることもありまし。草刈りや何か行事があるとみんなで集まり、作業が終わると、自家製漬

食を通して広がる「輪」

物や料理を持ち寄り、みんなで話しながら食べます。

「みんな、家族みたい」。地域で家族ぐるみの付き合い。だからこそ、みんなこのままでいてほしい。しかし、若い人が少なくなってきたので、この地域の将来に不安も感じています。

タイならではの「トムヤンクン」を地元小学校の交流会でご馳走したこともあります。「タイ料理は辛いから、家では日本の料理を作っています」。たまに、近くに住む同郷の人とタイ料理を作って楽しみます。

チエさんの楽しみは、年に4、5回山菜を採りに行くことです。生まれ育った故郷に自然がたくさんあって

も山が少ないため、山が多い兄川地域が新鮮に目に映ります。山菜などを互いにお裾分けしたり、おもてなしをするなど、食を通じた近所とおつきあひも充実しています。ご主人と山菜採りをすることもあるし、今後は、地元の高校3年生、長男の隼人さんとも山菜を採りに行きたいと張り切っています。

郷土芸能「兄川先祓い」

地域の人に支えられながら暮らしを楽しんでいるチエさん。一方で隼人さんも郷土芸能を習い、地域の伝統を受け継いでいます。

「友だちも一緒に踊っているの、楽しいし、やめたいと思っことは一度もありません。みんなで声を掛け合って踊ることは、とても楽しいです」。隼人さんが友人や地域の人に勧められて始めたとき、この舞いに込められた意味や歴史も分からずに踊っていました。地域の人に教えられ、今では、ずっと続けていこうと思っています。

チエさんは、隼人さんが「先祓い」を始めてから、郷土芸能そのものにも興味を抱いたといいます。タイにも踊りはあるし、舞いを通して何かを伝えようとする気持ちは、日本でもタイでも同じ。伝統芸能を踊る息子さんを誇りに思っています。

兄川先祓い

八幡平市(旧安代町)の館市地区兄川集落に伝わる伝統芸能。祭典のみこし行列の先頭にたち、みこしが通る道筋をはらい清めて舞うことに由来。「デンデコ」「立ち車」など8種の踊りがある。山伏神楽が変化したものと言われ、かつては、旧安代町田山地区のほとんどの集落で踊られていたが、兄川、曲田、田山、折壁日泥の四つが残っている。毎年7月第3日曜日に兄川稻荷神社祭典で、定期公演が行われる。

兄川先祓い保存会事務局 TEL:0195-73-2586



2010年12月11日(土)盛岡での初公演の様子。

たのは、地域の人たちの温かさ、そこに溶け込もうとするチエさんの気持ち。それは特別なことではなく、自然な形だといえます。

人と人をつなぐ場に

花巻への出店

花巻市上町商店街の一角、店の軒下に吊り下げられた異国情緒漂う赤いちょうちん。店の中にはテーブルを囲み、近所の人たちと楽しそうに語り合う源健(みなもとけん)さん。まるで、子供のころからそこに居るかのように地域に溶け込んでいます。

昨年、来日してから20年の節目の年でした。建築学の勉強のため日本の大学に留学。その後、経営学修士(MBA)を取得するため中国に戻り上海の復旦大学で企業経営の勉強をしました。卒業後、日本の企業に就職しまし



周囲の人を笑顔にする不思議な魅力を持った店主・源健さん。店内には、南部鉄瓶もお茶とともに並べられています。

たが、今までの経験や学んだことを生かそうと会社を立ち上げました。その第一歩が源氏商店です。花巻は妻の出身地ということもありますが、他に中国物産の専門店がないことや、誰でも気軽に買い物ができる場所をつくりたいと思いました。交通機関も充実していますし、自然が豊か。それに大都会より花巻のほうが、人情味があつていいですね。

家族・地域とのかわり

最初、店を出すのを家族は反対していました。それでも以前、営業の仕事や日本企業の社長のそばで経営に携わった経験から自信がありましたので、なんとか説得することができました。今では義父が店の宣伝を義母は子守を、妻は接客を担い家族みんなが協力してくれています。

出店の際、地元の人々から世話になりました。市役所や商工会議所、店舗を貸してくれた大家さん。みんなに支えられ今があります。大家さんは商品を並べる陳列棚など、あるものは使っていないよと言ってくれました。いつも何かと助けていただき、とても感謝しています。

出会いの場、交流の始まり

開店初日には、新聞で読んだといつて盛岡や仙台など遠いところから、来

て下さったご夫婦もいました。聞けば中国出身の奥さんが、自分の国の物に触れたいからと気遣い、4時間かけて来てくれたとのこと。ご主人が相手を思う心に感動しました。

私も国際結婚で習慣、考え、価値観が違う妻と時々ぶつかる時もありますが、人と付き合うには優しく広い心を持ち、お互いを理解することが大事だと思います。あの人は悪いところがあるからといって付き合わないと、世界が狭くなります。私は上海生まれですが両親が共働きだったため、遠く離れた田舎に住む祖父母に預けられ育ちました。祖父母の家は大家族で、みんなが私に優しくしてくれました。親しい人が困っていたら助け合おうのが当たり前。最近、自己中心的な人が多くなっているような気がします。

今は店で定期的に中国語の教室や書道教室、中華料理の教室を誰でも気軽に入れるよう無料で開いています。書道は私もまだ勉強中ですが、人に教えることで自分も教えられる。この教室に参加している中国人、日本人の生徒の皆さんが友達になり、どんな交流を広げてほしいです。世の中は出会いが大切。私自身、店のおかげでたくさんのお会いがありました。

今後の活動

中国では昔、食事で病気を治すことが重視され、病気を予防する食医

は文法中心でしたので。

会話の中で一番驚いたのは、うなずきです。日本人同士が、相手の話を聞いてうなずくのがとても不思議でした。ロシアと、まったく会話の仕方が違うのです。日本人独特の会話のリズムなので、ロシアでは、会話していきなずく行為はありませぬ。ロシア人は目を見て話をしており、日本のようにうなずくことでの確認作業がないです。

5、6年間は意識的に真似しました。今は自然に、うなずきながら会話をします。ロシア人から日本人のようだとと言われるほどです。

最初の1、2年は、食べ物でも苦労しました。ほとんど漢字が読めず、店を何を買うか迷いました。そのため、パッケージを見て買っていました。これは、食べることができそうだと思えばを買いました。スパゲッティのような食べ物と思ひ、作りましたが大失敗でした。

すしにもびっくりでした。ロシアでは生で食べる習慣はありません。煮たり、ゆで



(上)コロボフ・ドミトリさん。(下)岩手山の頂上にて。

ロシアから岩手に暮らして

コロボフ・ドミトリさん。ロシアのサンクトペテルブルク出身の33歳。岩手大学人文社会科学部研究科修了後、盛岡市内の翻訳会社で企画業務部長として、翻訳・通訳の仕事のほか、ロシア語講師も務めています。3年前に岩手大学時代の同窓生の日本人女性と結婚。岩手の自然や文化、歴史などを楽しみながら、岩手人の一人として暮らしています。

岩手に来た当時の印象

子どものころから日本には大変に興味がありました。そのため、日本語の学べる大学に進学しました。当時は、好きで勉強するだけで、その後まさか日本に行けるとは思ってもみませんでした。

ロシアの大学では、日本に対する情報があまりない時代で、特に現代の日本の情報はありませんでした。大学4年のとき、岩手県に行くことになりましたが、岩手の名前も知りませんでした。

岩手に来たのは、1998年10月。日本では、寒い地域でしょうが、ロシ

岩手で仕事をして

私は2005年から、岩手の会社で仕事を始めました。仕事をしてから、正確に言葉覚ええました。ただ、習慣、仕事の考え方が違うのでストレスも感じました。遅くまで、仕事をしたり、なかなか長い休みを取りにくいなど、日本独特な文化を感じました。今は、大分慣れた部分もありますが。

奇妙だったのは、上下関係です。先輩後輩という関係は不思議でした。目上の人へ言葉遣いが違います。ロシアでは、年齢に関係なく、同じ言葉遣いをします。

仕事場までは、自転車やバスで通勤しています。休日は岩手の自然の素晴らしさを楽しんでいます。岩手は山に囲まれており、岩手山、姫神山など山登りを楽しんでいます。川沿いを走るのも好きです。

岩手や盛岡の伝統文化や古い街並みも好きです。ぜひ、残してもらいたいですね。結婚して生活はさらに日本の、岩手的になりました。それぞれ、独自の文化や価値基準があり、違う世界を理解することの面白さと大切さを実感しています。

中国物産 源氏商店

紹興酒、豆板醤、黒酢、花椒(ホアジャオ)などの調味料、金針菜、ピータンなど、県内ではなかなか手に入りくい中華食材を取り扱っている。他にも中国のビールやジュースと茶葉、母国の情報を知りたい中国出身の人のために、中国の新聞も多数置いている。

〒025-0087 花巻市上町2-1
TEL/FAX:0198-22-2200
E-mail:genjishoji@hotmail.co.jp



地元の方から「健康の源、楽しみ源、幸せの源」と親しまれている源氏商店。